

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 34



八幡浜市 座敷雛

特 交 流 集

『人 ふれあいを求めて』

- 新たなふれあいの風を求めて
- 第二の故郷「高市」
- であい ふれあい そして挑戦
- 手作りの農山村リゾート地域の創出をめざして
- 『夢・感動・ふれあい』…ひょうたん型由利島共和国

地域づくりは人づくり	愛媛県知事／伊賀 貞雪	3
------------	-------------	---

(特) 交流 (集)

「人 ふれあいを求めて」

新たなふれあいの風を求めて	肱川町／櫻田 和明	4
第二の故郷「高市」	広田村／奥迫 宏治	6
であい ふれあい そして挑戦	中島町／中田 博文	8
手づくりの農山村リゾート地域の創出をめざして	久万町／浅井 一郎治	10
『夢・感動・ふれあい』…ひょうたん型由利島共和国	松山市／國元 通生	12

論談 まちづくりー

生涯学習のまちづくりーその1ー	愛媛大学教育学部教授／讃岐 幸治	14
-----------------	------------------	----

レポート

地域づくり研究サロン		16
------------	--	----

地域づくり研究会議から

地域づくりのペースを求めて (V)	五十崎町／宮本俊一	18
-------------------	-----------	----

ふれあい広場

リレーでちょっトーク (広見町、八幡浜市から)		20
元気印レポート (八幡浜市から)		22
〈我らが双岩実年会〉		
お便りコーナー (松山市から)		24
〈絵画展で地域の文化活動に協力〉		

Information

媛のくにフラッシュ		25
〈新宮村・広見町・愛媛県緑化センター・愛媛県・道後温泉誇れるまちづくり推進協議会〉		
まちづくりセンター平成5年度事業計画		28

特集「交流」

今号のテーマ

「人 ふれあいを求めて」

今日、経済、社会、文化、教育、政治、行政等の人間活動のあらゆる分野で異なる活動主体間の交流が行われている。それが様々な新しいものを創造し、新しい価値を生み出している。今や、地域を活性化させるためには「交流」は欠かすことの出ない要素となっている。

過疎化、高齢化の進む市町村においては、若者の定住はなかなか難しく「定住人口」という考え方から「交流人口」という考え方への発想の転換も必要であると思う。

この交流人口を増やし、地域の活性化を目指すための手段として様々な「交流」の形態が取られている。

そこで「舞たうん」では先号から「交流」をテーマに特集を組みまして、第二弾の当号では「人 ふれあいを求めて」と題し、人と人との交流にスポットを当て、地域づくりを進められている五市町村にご登場願いました。

表紙の言葉

座敷雛は、その家庭の長女の初節句を祝うものですが、たった二日間の事なのに、大掛かりで、豪華な雛祭りをお家で行なうというのがまたすごい。

平安時代の宮庭園遊に引き寄せられたようでした。

愛媛の姫にふさわしい行事でした。

柳原あや子



地域づくりは 人づくり

愛媛県知事

伊賀 貞雪



への変革といったことが強く求められている。

二十一世紀を指呼の間に控え、今日の一九九〇年代は、非常に変化の激しい、また不透明、不確定、不安定な時代であると言われている。

それだけに、国の内外はもとより、私ども地方においても、様々な課題や難題が山積しているが、それらの一つ一つを着実に解決していくためには、あらゆる分野において、思い切った変革を行っていくことが重要である。

特にこれからは、経済大国から生活大国への変革、労働中心の社会からゆとり社会への変革、中央集中から地方分散への変革、男性中心社会から男女共同参画型社会

その中で、中央集中から地方分

散への変革を実現していくための決め手は、一つは、高速交通体系の整備をはじめとする基盤整備の促進、そしてもう一つは、個性豊かなまちづくり、むらづくりの推進による地域の活性化であり、これらを通じて中央と地方、都市と農村のアンバランスを解消していくことが不可欠であると考えている。

地域づくりについては、平成元年の「ふるさと創生一億円事業」を一つの契機として、全国各地で「自ら考え自ら行う地域づくり」が活発に進められてきた。

県内市町村においても、イベン

トの開催や人材の育成、組織づくりなど、毎年二百件を超える事業が実施され、またふるさとづくりの中核となる施設についても、各市町村で鋭意整備が進められている。

更に、今治・宇和島両広域市町村圏においては、ふるさと市町村圏基金を設置し、基金の運用益で圏域が一体となった各種ソフト事業が展開されている。

県では、こうした取り組みに対して、全国に先駆けて「愛媛県ふるさとづくり推進条例」を制定し、これに基づいて各地域のふるさとづくりを積極的に支援しているところであるが、県内の各地域において地域の資源と知恵を活かしたふるさとづくりが進められていることを大変心強く思っている。

また、現在の第二期生活文化県政においては、「快適で個性あふれる地域づくり」を基本政策の一つに掲げ「ふるさとづくり構想」の推進に取り組んでいるところであるが、特に平成五年度には、明日のふるさとづくりを担うリーダー

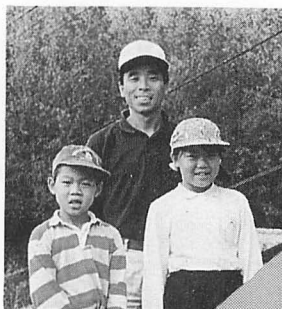
育成のための「ふるさと再発見・創造塾」の開設、各地域のふるさとづくり事例を全国に向けて紹介する「全国ふるさとづくり広報事業」への参加など、新たな施策を展開することになっている。

そして、全国的にも珍しい民間レベルのまちづくり支援機関である「愛媛県まちづくり総合センター」との連携のもとに、ふるさとづくりに対する積極的な支援を展開していきたいと考えているが、「地域づくりは人づくり」と言われているように、ふるさとづくりの中心はやはり、県民一人ひとりである。

自信と誇りをもって生活できるふるさとづくりに向けて、県民の方々の積極的な参加と活躍を期待している。

交流—人ふれあいを求めて—

新たなふれあいの風を求めて



■風おこし運動による町づくり

「わき上がる風でロマンの町づくり」肱川町の町づくりキャッチフレーズです。町では昭和六三年に風おこし対策室を設置、以来毎年「風おこし大会」を開催し、住民への風おこし運動総参加の意識付けを行うとともに、「風」にこだわった町づくりを行っています。「やる気起こしの風」でスタートしたこの運動ですが、いつしか「自然現象の風」も巻き込んで、いよいよ本年度にはそのシンボルとなる「風の博物館」が完成します。

肱川町役場

櫻田 和明

この風おこし運動の一環として特産開発推進事業があります。これは肱川町で現在生産されている農林産物やその加工品を見直して、新しい視点からの新製品の開発などを行い、町を代表する特産品に育成、定着させることにより、地場産業を振興し就業の場の確保と所得の向上を図ることを目的としています。このなかで「特別町民制度」を創設し、都市住民と農林産物の宅配を通して交流を行っています。これには一万円コースと二万円コースがあり、それぞれ四季の産物を年二回と四回送りますが、その素朴な味が人気を得て、

現在全国で一、〇〇〇名の方々に特別町民になっていただいています。

■農業体験交流館

「特別町民制度」の中に、特別町民の集いへの参加特典があり、毎年春に行う山菜ツアーが好評で、昨年も一二〇名の参加があり、大賑わいでした。

このようなツアーの参加者が、のんびりとひと休みできる施設の必要性に迫られていた時に、明治時代に建築された木造二階建、建物の総面積三七四平方メートル、部屋数大小合わせて一〇室、台所、浴室、トイレ付きの農家があると聞いた。家の前には駐車場があり、さらに田、畑、山林もついている。願ってもない物件であり、早速これを交流の拠点にすべく町で購入しましたが、予想以上に傷みが激しく内部の改修には時間を要しましたがが無事終了し、「体験交流館」と名付けました。

以来、施設はうどん打ちやそば

打ちの体験学習や畑でのいも掘り体験、山林での小鳥の学習など体験学習施設として、また都市住民を対象としたふれあい農園、野菜の収穫ツアー、子供を対象にしたワンパクツアー等各種の体験ツアーに利用しています。この中に田植えと稲刈りをセットした「米コメ体験ツアー」があります。

■米コメ体験ツアー

体験交流館前の水田を利用した「米コメ体験ツアー」は、「農作業の基本である米作りを通して、農村及び農業の理解を深めるとともに、相互の交流を促進し、肱川町に活力を、都市住民にゆとりとうるおいをもたらせる」ことを目的として、平成二年より始めました。平成四年六月二日、今年で三回目の田植えの当日、松山市を中心として親子五四名に参加いただきました。

昨年、一昨年に続いて参加のご家族もあり、「こんにちは」の声もはびきます。そして、今年初めて参加されたご家族も、田植え作業



づくりの
体験を行
って終了。
また秋の
収穫に会
う日を楽
しみに解

が待ち遠しい様子です。管理をお願いしている農家の方に苗の植え方の説明を受け、いよいよ作業開始。もちろん初めて田んぼに入り

散しましたが、子供の夏休みの自由研究や、「どうも気になって」といったご家族が、秋の収穫までにたびたび肱川町を訪れました。

ます。しかも全員素足で入るために足の裏がくすぐったいやら気持ち悪いやら、とにかく賑やかな開幕です。一家族の責任面積は一二平方メートル、初年度は自由に植えてみましたが、後の管理と稲刈りがスムーズに行くようにと、本年度は綱を張っての田植えです。

そしていよいよ秋一〇月一八日、自分たちが植え、大きく育った稲とご対面して大喜び。今では肱川町でもあまり見られなくなった鎌での稲刈り作業、終了後はもちつきや栗拾いを楽しみ、本年度の「米コメ体験ツアー」を終えました。

ふれあいの風を求めて

作業開始から一時間、途中ギブアップする人も無く最後まで頑張りました。曲がりくねった苗がほとんどですが、小さな手で一生懸命植えた苗、無事に育ってくれと祈らずにはられません。

作業の後は、近所の農家の方たち手作りの昼食会、そして柏もち

この「米コメ体験ツアー」の成果としては、地元農家の方とのふれあいが挙げられます。このツアーに参加した松山市の方からいただいたお便りには、次のように書いてありました。



いただきました。稲刈りは他の方と一緒に出来なくて残念でしたが、田植えの時は本当に皆様に温かくもてなしていただいていたことがうございました。特にお年寄りの方々の温かさにつれて、どうぞどうぞいつでもお元気でいてくださいと祈るような気持ちでお別れさせていただきました。お世話してくださった皆様どうもありがとうございました

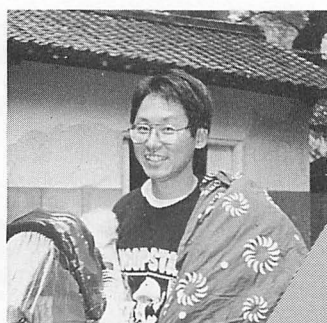
他にも参加した多くの方々よりお便りをいただいています。このような便りをいただくたびに、ふれあいの喜びと次の交流イベントへの活力がわいてきます。わが町の交流については、規模、施設の問題、交通の問題、地元への波及効果等課題も多いのですが、「わき上がる風でロマンの町づくり」を合言葉に、新たなふれあいの風を求めて頑張っているとことです。

「きれいに精米してくださったお米をお送りいただきました。思ったよりもありがとうございました。思ったよりたくさんのお米でした。でも、田植えや稲刈りのことを考えますと、手に入れるものはわずかだとつくづくお米のありがたさを味わっています。私共はほんの少しだけ参加させていただき、後はみな地元の方々のお世話によって貴重なお米を得ることができ感謝致しております。家族が揃ったところでおいしくい



交流—人ふれあいを求めて—

第二の故郷「高市」



広田村・高市小学校

奥迫 宏治

■山村留学制度の発足

平成四年四月、地元の児童三名に加え、全国各地から二九名の留学生を迎え、広田村立高市小学校の新学期がスタートした。

児童数の減少により、統合か、現状維持か、山村留学制度の導入による存続か、静かな山里が揺れ動いた。その結果、山村留学制度の導入が決定され、平成四年度より実施の運びとなった。

この環境の変化は、山村留学生

のみならず、地元の児童にも大きな影響を与えた。次の作文は、スタートの年の五月に地元の三年生の児童が書いたものである。

「できるようになったこと」

運動がとっても楽しくできるようになった。

勉強が楽しくできるようになった。

バレーボールができるようになった。

友だちと楽しく話すことができるようになった。

多人数でできるゲームができるよ

うになった。

町の学校ではこんなこと当たり前かもしれないけれど、ここは町じゃないからこんなことができるなんて思いもしなかった。

私は、山村留学があつてよかったと思っている。

そりゃ、けんかをすることもあるけれど、楽しいことの方が多いはずだ。

だから、友だちを大切にしていきたいと思っている。

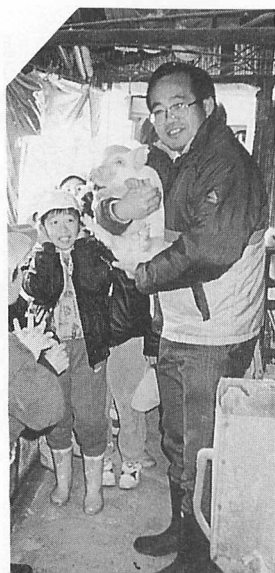
ほかに何かをできるようになつたと思えることを多くするため……。

■地域に根ざした体験学習

子どもたちに、高市の豊かな自然の中で、多くの体験をさせるためには、地域の方々のご協力が絶対に不可欠である。年度当初から山菜採り・竹の子掘りをはじめ、こどもの日祭り・田植え・蛍祭り・キャンプ・稲刈り・陶芸教室・お月見会・木工教室・秋祭り・いのこ・薬細工教室・もちつ

き・ふるさと産業祭・お年寄りとの交流会・ふるさと探検等振り返ってみると、地域の方々のご理解とご協力のおかげで運営できたものばかりである。

その中から三つの活動を取り上げてみたい。



○ふるさと探検

全校児童で高市の特色ある所を徒歩で巡っている。

第一回は、鴨滝方面に出かけ、その地区のお年寄りの方に鴨滝の言い伝えを聞いたり、地元の児童の家を訪ねたりした。約四キロメートルの行程であった。

第二回は、白滝山の頂上に登った。途中、急な道、細い道、いばらの道等、道なき道を通ってまさに「探検」という名にふさわしい行程であった。



第三回は、養豚場を見学させていただき、豚の飼い方等のお話を聞いた。子どもたちは初めて身近に接する豚に驚きながらも、親しみを感じていたようだ。その後、林道を散策した。途中、長い氷柱がたくさんできている所があり、それを手にした子どもたちはとても感動していた。

この他にも機会をみて、地域探検を続けているが、子どもたちは改めて高市の美しい自然を大切に思い、そこに暮らす人たちの優しさで逞しさに心をうたれたように思う。

○秋祭り

高市はお祭りの盛んなところで、地域をあげて協力してやってきたが、児童の減少とともに取りやめになったものが多かった。昨年は、地元の児童と留学生全員が参加して「舎儀利」「獅子舞い」「こども神輿」が復活した。

「舎儀利」は、神輿の先導役として、羽織袴に陣笠、たすきがけの男子児童が、太鼓と鐘を打ち鳴らし、笛の大人がその後に付き、さらに狐や猿に扮した男子児童が振り付けて続く、先払いの行列である。神社での神事の後出発した行列は、お旅所まで行進した。

「獅子舞い」は、児童が漁師や狐に扮し、大人二人で舞う獅子とともに、神社とお旅所の二カ所で舞った。

「こども神輿」は、樽に縄や飾りを付けた手作りの神輿を作り、大人神輿三体に交じって学校周辺を練り歩いた。(教員も獅子舞い等に参加した)

これらの活動を通して、児童が積極的に地域の伝統芸能に参加し、祭りの楽しさ、喜びを満喫することができた。また、準備や練習を通して、地域の方々とのおふれあい、郷土愛も育ったように思う。

○お年寄りとの交流会

各学期一回の年三回、地域のお年寄りと子どもたちとの交流会を

実施している。

一学期の交流会では、屋内運動場においてお年寄りと一緒にレクリエーションや昔の遊びをして楽しい時を過ごした。

二学期の交流会では、運動場でお年寄りにクロケートを教えていただきながらゲームを楽しんだ。

三学期の交流会では、運動場でお年寄りと一緒にクロケートをした後、図書室で給湯を飲みながら昔話を聞かせていただいた。

この他、こどもの日祭りや運動会、学習発表会にお年寄りの方々に招待し、一緒に演技をして楽しんでいる。

これらの活動を通して、児童は、広く深い知識と豊富な体験を持っている優しいお年寄りの方々に対して、敬愛の気持ちと感謝の心を持つことができたように思える。また、教師自身も、今まで知らなかった地域の言い伝えや遊びを知ることができて、たいへん勉強になった。

山村留学の目的の一つとして、

都会ではできない色々なことを、豊かな自然の中でのびのびと体験するというのが挙げられる。

そのような体験は、学校や留学センターだけの力では到底できない。これからも、学校・留学センター・地域の方々が三位一体となつた山村留学制度にしていかなければならないと痛感している。

山村留学生にとっても、そして私自身にとつても、この高市を第二の故郷として思い出に残る地になりたい。また、地元の児童や地域の人々にとって、山村留学が全国の人々とのふれあいを広げるきっかけになるようにしていきたいと思う。



交流—人ふれあいを求めて—

であい ふれあい そして挑戦

—トライアスロン中島大会—

第7回トライアスロン中島大会
ホームステイ部長

中田 博文



■四国で最初の大会

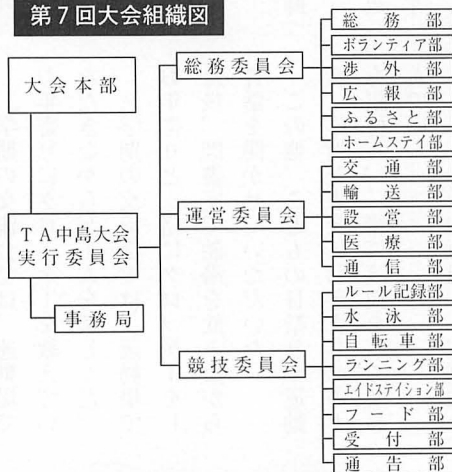
今でこそトライアスロンという言葉は珍しくありませんが、当初私達がトライアスロン大会を始めようとした昭和六一年頃は、全国でも四、五ヶ所でしか開催されていない状況でした。言うまでもなくトライアスロンは、一人が連続して水泳・自転車・マラソンを行う過酷な競技です。

その当時、全国的に村おこし、

町づくりと騒がれ、中島町においても商工会青年部が中心となり、「村おこし実践大学」を組織し勉強会を開いていました。そんな中、「中島町でトライアスロン大会を開こう」という話があり、初めてトライアスロンという言葉を目にしました。何となく中島向きで面白そうなので話は盛り上がり、青年部が中心となり取り組みることになったのです。

しかし、調べれば調べる程に協力者の確保や資金、許認可関係等問題は山積みし、結局は商工会長の努力によって町や町議会等に働

第7回大会組織図



の依頼、部署割り等と大忙しの日が続きました。

そして、七月六日、四国で初めての大会として競技はスタートしました。天気はくもり、水温は二

きかけていただき、実行委員会を組織してのスタートとなったのです。

三つの委員会と一六の部会で構成された実行委員会が開催されたのは、昭和六一年二月初旬でした。さっそく大会に向けての準備が始まりました。選手の募集、五百人に余るボランティア

一度。一六五名(女性七名)が挑戦し一四四名が完走しました。コースはミニ版でしたが、全長七二キロメートルで自転車は六往復、ランニングは第一と第二に分けての変則コースが特徴でもあった第一回大会でした。昨年から、水泳・五キロメートル、自転車四〇キロメートルのコースとなっています。



■であいの前夜祭

トライアスロンのため来島される選手や応援の皆様にと、ボランティアの母ちゃん達が献立を考え、夜を徹して心のこもった手料理を作り、もてなしています。会場では、ミカンコンテナを台にし、その上にベニヤ板を置いたテーブルそして手料理が並べられ、会場の雰囲気は一流ホテル以上です。

初めて顔を合わせる人同志でありながらトライアスロンという同じ目的もあり、また料理のせいもあってか旧友の如く話が弾みます。再会を喜び無事を確かめ合い、明日の健闘を誓い合う姿があちこちで見られるのです。

前夜祭のヒットメニューである手作りうどんは、いつも長い行列ができてしまします。一杯のうどんからでも、交流が始まっていくのです。

■ふれあいのホームステイ

昭和六三年の第三回大会からは「ふれあい」を重視したホームス

テイ制度が導入されました。何しろ初めての試みでもあり、受け入れ先は五軒でした。会を重ねるに従って協力者も増え、昨年の大会では三〇軒で八〇人程をお世話しました。

大会前日から、島には続々と選手や応援の家族が船から下りてきます。手を挙げて知らせ合う選手や島人たち。案内所で初めて出会う人達の光景が見られ、島は大賑わいです。一步玄関に入ると家族同様で、いらぬ気遣いをせぬことが肝心。これがホームステイの秘訣かと思っています。やがて心が打ち解け、よもやま話に花が咲くのです。

我が家では毎回七～八人をお預かりし、とても賑やかで和やかです。子連れの三人組、ボクダン＆ポビーの外人組、万年一〇〇位のおしどり夫婦と色々です。

大会当日、私達も必ず応援に行きますが、特にお世話をした選手には自然と力が入ります。必死になつて順位を知らせてハッパをかけると、選手も手を挙げて応えて

ゴールを目指して駆け抜けていきます。

幾つかのドラマを生んだレースは一日で終わってしましますが、選手たちはそれ以上の思い出を胸に島を去っていきます。

数日後、心のこもったお便りをいただく度に、妻と二人で「本当にお世話をしたよかった」と思うのです。記念に撮った写真を送ると、また便りが届いたり、お付き合いの輪はどんどん広がっていきます。



■終わりに

よちよち歩きの手探り状態で始まったトライアスロン中島大会。数えて今年は八回目。選手も三百余名となり、「トライアスロンの島・中島」と言っていただけのようになりました。決してスマートさはないけれど、何から何まで手作りの大会でやってきたからだと思っています。五百余名のボランティア、沿道からの応援、ホームステイの協力など島人が何らかの形で係わり、支えになっています。一昨年の台風一九号で、島は甚大な被害を受けましたが、トライアスロン参加選手関係者からの励ましを決して忘れることはできません。このことで、トライアスロンは無駄ではなかったと思い、出会いとふれあいの素晴らしさを痛感しています。そしてこの糸を更に大きくつなぐよう努力をしたいと思っています。

「舞たうん」をお読みの皆さん、今年はあなたも挑戦してみませんか。お待ちしておりますよ。

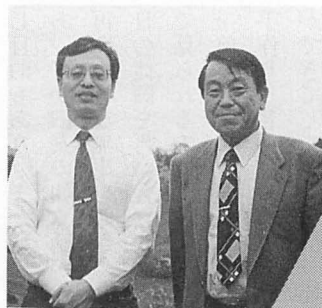
手づくりの農山村リゾート

地域の創出をめざして

久万町役場

浅井一郎治

東大の大森 彌先生と共に



浅井さん

■観光事業の歩み

久万町の本格的な観光事業への取り組みは、昭和四〇年代後半からである。

その先駆けとなったのは、国民宿舎古岩屋荘の建設。

この当時、水田のは場整備や減反水田を活用したトマトなどの夏秋野菜の露地栽培、あるいは優良木生産を目指した久万林業主産地づくりが本格化した時期で、これ

らを視察するため来町する方が次第に増加してきたため、くつろいで研修し宿泊のできる場を造ろうというのが建設の動機であった。ちょうどこの頃、二つの民間ゴルフ場も建設され、また昭和四七年に指定を受けた自然休養村の中心施設として、昭和五二年には「ふるさと村」がオープンした。

この時期、農山漁村の過疎問題とともに、その表裏関係にある大都市の過密問題が大きな社会問題となり、都市住民の自然やふるさとへの志向が強まった時期でもあった。その同時解消あるいは双方

のメリットを活かすことを狙った施策の一つが、農省の自然休養村事業であったと思う。

現在までの二〇年間、町の一連の観光施策は、モデルのない手づくり事業であった。その経過を説明すべきだが、また、それぞれの施設及び活動には動機と背景が存在したが、誌面の都合で省略し項目を述べるにとどめたい。

「ふるさと村」では家族旅行村・食文化工芸体験施設・天体観測館・野鳥の里公園・ケビンなどが整備されてきている。

すばらしい数々の館蔵品と木の香漂う町立久万美術館、美術館と

ふるさと村「秋まつり」



セットされ婦人一六グループが参加して特産品開発を図っている物産館みどり、夏の涼しさを生かしたスポーツ合宿の町としての拠点施設であるラグビー場と屋内ゲートボール場、異分野になるが、木にこだわる町づくりの一環としての本格木造建築の小学校・屋内体育館、公営住宅等も整備された。

また、民間では町内の若手事業者がスノーマシン・アストログレインデ・リフトを備えたスキー場の整備を、そして関連分野では農協Aコープと小売業者八店をドッキングした共同店舗も整備された。一方、農家などの取り組みとしては、農産物直販・観光農園の開業を目指した観光農業生産組合や、久万らしい手づくり木工品を目指す木彫会、りんご園の技術と経営向上をねらいとしたりんご研究会、地元の素材で自然食品の漬物づくりを図る婦人農産物加工組合などが相次いで誕生し、活動が始まってから一〇一八年が経過している。

■ふるさとの森事業

以前は、町の観光地と目されたのは、三坂峠・古岩屋公園・笛が滝公園くらいであった。

前述した一連の観光事業の歩みは、従前の観光の概念とは全く異なり、わが町の農林業と農山村の生活、そして高原の佇まいを資源として活用した点に大きな特色があったと思う。

また、少し長く事業紹介をしたのも観光事業が単一として捉えられるものではなく、総合産業として町の全てが資源という考え方に立っているからでもある。

そのうちの具体例の一つが「ふるさとの森事業」である。

「森林の共同経営者になつてみませんか。そして久万町を第二のふるさとにしませんか」という呼びかけに応募した会員は、北海道・宮崎県の二七都道府県に亘っており、会員八三〇名、契約数は一口三〇万円で九八三口である。

町有林七八ヘクタールの立木（契約時二二―二九年生の杉・檜）

を、二〇年後に分収する森林の共同経営制度と、特産品直送・ふるさと通信・施設利用割引などの特典のあるふるさと会員制度の二つを組み合わせた点に特徴がある。

主要都市で開いた会員の集いには、町・議会・経済団体の理事者などが出席して懇談を行った。

会員からは、森林の分収もさることながら町の特産品を送ってくれたり、町の様子を知らせてくれたりと、第二のふるさととしての心の拠り所になっているという声が多く聞かれた。

また、毎年実りの秋にはりんご狩りツアーと会員懇談会を開いており、それを楽しみにしている会員も多い。

この「ふるさとの森事業」も今年で一〇周年を迎え、より心の通う記念行事と現在企画中である。とにかく、この事業は一過的な観光とは異なり、少なくとも二〇年間、人・物・情報などの交流が続く訳で、その過程で久万町という一農山村を通して、わが国の農林業と農山村についての理解と、



会員を通しての都市への理解が相互に深まる機会の一つになっているとも考えられる。

その意味では、観光客を特定化した「ふるさとの森事業」が観光の概念を深化させたということもできよう。

■今後の取り組み

一つは、今後も町に住む人々の生産と生活が何にもまして大切であり、住民を中心に置き、町の特性を生かした産業の振興を図り、各方面のくらしの質を高めることが重要だと思ふ。それが訪れる人々に輝きと魅力を感じさせることにもなると考える。

二つめは、自然が満喫でき、農林業との関わりの中で、地元の人々との交流を重視した長期滞在型の手づくりのリゾート地域の創

出を図っていく方向である。リゾート地の本来の目的である

『たびたび訪れる地域づくり』のため、市民農園などの試行も始まったばかりである。

三つめは、昔も今も変わぬことだが、訪れる人々を温かくもてなす心を大切にするものである。―以上、わが町の交流の極一部を紹介した。

まとめて言えば、久万町の町づくりは「自然と共生する高原文化のまち」を目標に、手さぐりの挑戦が続けられているといえよう。



交流—人ふれあいを求めて—

『夢・感動・ふれあい』……

ひょうたん型由利島共和国

21世紀えひめニューフロンティアグループ

國元 通生



■われらフロンティア

21世紀えひめニューフロンティアグループ……この思いつき長い名前を持ったグループを知っていますか。

「今やれる青春」「一年一事業」「社会へのゆさぶり運動」この三つのスローガンを掲げて、二世紀までがんばろうと旗揚げして一〇年余り。これまで県内の子どもたちを対象として、「無人島にいど

■北本市からのラブコール

む少年のつどい」や農業体験活動「モウーモウー塾」などを行い、多くの子どもたちに、夢と感動を与えることができたと考えています。

一〇年の成果を踏まえ、埼玉県北本市との交流活動をここ三年続けています。

四年前、埼玉県北本市で開かれた青少年育成北本市民会議主催の「進歩ジウム」にグループ代表の若松進一が参加し、「無人島にいどむ少年のつどい」や「モウーモウー塾」「丸木舟航海」等の体験活動を

紹介したことが、参加者に大きな感動を与え、「海のない埼玉県」と「海に囲まれた愛媛県」の交流を無人島で行い、青少年に感動を与えたい」との熱いラブコールが、北本市からフロンティアグループに届けられました。

フロンティアグループとしては、北本市民を揚げてのラブコールを受け、これまでの愛媛県に限った視点から、県域、地域を超えたグローバルな視点へと発想を変え、北本・愛媛という異なった環境で育った人との交流を、無人島という非日常の場で行うことによって、青少年により大きな感動を与えることができるとの考えから、ラブコールに応えることにしました。

一九九〇年五月、初夏の松山空港に北本市の市民会議のリーダー三人が降り立ち、「無人島にいどむ青少年のつどい」の打ち合わせが始まりました。

以後、愛媛と埼玉との七百キロ

の距離もものは、二カ月余りの間、毎晩電話で打ち合わせを行い、充実した三泊四日の無人島体験プログラムを作り上げることができました。

このような経過と無人島のつどいの共催という形で、フロンティアグループと北本市の交流が始まったのです。

■ひょうたん型由利島共和国

一九九〇年七月、第一回目の「無人島にいどむ青少年のつどい」を、私たちが「ひょうたん型由利島共和国」と名付けた温泉郡中島町の無人島「由利島」で行いました。

参加したのは、北本市側から副大統領の黒沢さんはじめリーダー一人と一般募集した二五人の子どもたち、愛媛県側から大統領の若松さんをはじめリーダー一人とやはり一般募集した二七人の子どもたち。北本と愛媛の子どもたちが混じりあって、各グループを構成しました。

最初子どもたちは、大きな期待を抱きながらも、ちよっぴり不安

もあり、戸惑いがちであったように思います。しかし、無人島の生活は、ないない尽くし。原始の生活そのままに、大自然に立ち向か



うには、自分たちの知恵と能力し
かありません。炎天下、流木を拾っ
ての家づくり、遠くの井戸まで命
の水汲み、食べ物の調達等、どれ
をとってもグループ内の協力がな
いといけないことばかりです。

生まれたときから、電気も水道
もガスもテレビも何でもある恵ま

れた文明生活にどっぷり浸かって
いる子どもたちには、この苛酷な
環境に投げ込まれたことによつて、
北本と愛媛の別なく、仲間意識と
団結心が芽生え、協力の大切さを
学ぶことができたと思います。こ
れは、参加したリーダーも同様で
す。ひとつ間違えば、死亡事故に
もつながるような苛酷な環境の中
で、協力して活動をやり遂げよう
とするうち、リーダー同士ずつと
前から知り合いであったような仲
間意識と信頼感が結ばれるようにな
りました。

長いようで短い無人島での三日
間を終え、白かった肌に三日間の
思い出をたっぷり焼付け帰路につ
き、北本と愛媛に別れる解散式と
なりました。解散式では、「由利
島共和国の歌」を歌い、一人ひと
りの仲間と別れの握手をするうち、
リーダーや子どもたちの目には、
大粒の涙があふれていました。子
どもたちの涙に多くのことを感じ
取ることができました。子どもた
ちは、この無人島での出会いや感
動や思い出を胸に、きつと真つす

ぐに育つていつてくれると信じて
います。

別れは、新しい交流の始まり。
北本と愛媛の各地でこの交流の小
さな芽は伸び続け、いずれ将来大
輪の花を咲かせてくれることでし
よう。

■交流の今後

九一年も同様に無人島のつどい
を由利島で行い、昨年はサメ騒動
など諸般の事情で、西宇和郡瀬戸
町に場所を移し、「日本一細長い佐
田岬半島にいどむ青少年のつど
い」として実施しました。

この三年間北本市と愛媛の子ど
もたちに、新しい夢と感動を与え
ることができたと思いますが、当
初から三年計画ということで始め
た事業ですので、一応区切りがつ
いたことになりました。

無人島のつどいの共催によつて、
北本市の市民会議もフロンティア
グループもお互いが刺激を受けあ
い、それぞれのグループ活動を活
発化させる効果もあったように思
います。北本市とは、その後ミカ

ンによる交流も始め、北本市に愛
媛の新鮮でおいしいミカンを安く
送ることによつて、愛媛県をより
知っていただくような取り組みも
しています。

無人島のつどいを通して培った
北本市との絆は、強いものとなつ
ています。二月には、北本市の青
少年健全育成大会にフロンティア
グループから五名が参加して、末
永い交流を誓ってきました。

私たちは「二一世紀を担う子ど
もたちの健全育成のために汗を流
そう」という共通認識にたつて、
これからも活動を続けていきたい
と考えています。



生涯学習のまちづくり

— その一 —

愛媛大学教育学部教授

讃岐 幸治

はじめに

生涯学習という言葉は、次第に日常用語として定着したように思われるが、しかし、未だに興味活動や稽古事ぐらいにしか理解されていないようである。市町村の行政担当者と話しても、生涯学習を社会教育と同義に解釈したり、生涯学習は教育委員会の領域と割り切っている者が多い。

編集者からこの原稿の依頼があったとき、「生涯学習のまちづくり」のテーマではどうだろうかと思えたところ、その時いい返事が出なかった。多分その時、編集者であれば、生涯学習というのは教育委員会の担当領域であり、「まちづくり」の機関誌である「舞たうん」の内容には相応しくないの思い

があったからではないだろうか。

しかし、どうだろうか。「まちづくり」を考えていく場合、地域文化とか自治能力とか、あるいは総合行政、ボランティア、地域学、地域特性、連帯や交流、女性の社会参加などがキーワードとして挙げられるが、それらはまた「生涯学習」を考えていく場合のキーワードでもある。

一般に「まちづくり」の成否は「人づくり」にかかっているといわれる。というのは、住民一人ひとりが気付き、学びあい、知恵を出しあい、それぞれの持ち味を生かしての活動を通して、はじめて「まちづくり」は行われていくからである。したがって、「まちづくり」を進めていこうとすれば、

どうしても地域に知的風土を高め、個性豊かな人づくりを目指した「生涯学習」の推進に関わらざるをえない。「まちづくりのためには生涯学習」が必要になってきている。

また「生涯学習」の振興といっても、最終的にはその地域の教育的風土如何にかかっている。どぶ川の地域と鯉の泳ぐ川の地域を比べたとき、どちらが学習環境として優れているか。環境が人をつくるといように、「生涯学習」の推進は、生涯学習環境として誇りと自信の持てる教育的雰囲気と溢れた活力ある「まちづくり」を前提とし、またそれをねらいとして展開されざるをえない。「生涯学習のためにはまちづくり」が必要になってきているのである。

「生涯学習のためのまちづくり」か「まちづくりのための生涯学習」か、そのどちらを目的、手段にするのかの違いはあるにしても、両者は不可分の関係にあるといっている。そこで、現在どういった方向で、「生涯学習のまちづくり」が

進められているか、幾つかの事例を紹介しながら「まちづくり」と「生涯学習」との相互の補完、強化のあり方を見ていくことにする。

一、ある町長の「生涯学習のまちづくり」の呼びかけ

「まちづくり」と「生涯学習」との理論的な関係付けは徐々に展開していくとして、現在具体的にどのように捕えているのか。新潟県の「生涯学習モデル市町村」の指定を受けた川西町の「生涯学習のまちづくり推進本部長」でもある南雲春雄町長の住民への「呼びかけ」を紹介してみよう。

「川西町は、三年計画で新潟県の『生涯学習モデル町』の指定を受けて、生涯学習の基礎づくりに努めています。」

いま日本中の市町村で、行政の方向が大きく転換しています。それは、従来とかく国や県の方針でといった、上意下達型の行政から、地域住民一人ひとりが持つノウハウとか、個々の持ち味ともいえるべきものを、まちづくりに発揮してもらう——。つまり、あらゆる

面に住民の参加といった形式で、地域の特色または個性を生かした手づくりのまちづくりを進めようという方向付けです。

このような市町村行政の軌道修正は、高齢化、国際化、情報化の急激な進展という社会変貌に起因するところです。このような潮流のなかでは、地域住民のすべてが、まず自らの内面を高め、豊かにする学習が求められます。人々は、生涯各期における人間形成に、自発的な意志で、必要に応じた手段や方法を自分自身で選んで学習することが求められます。

町では、こういう皆様各人の学習活動を、いろんな角度からお手伝いし、助成することによって、生涯学習の基盤整備を図りたいと考えています。それは、このような皆様の自由意志と、総意に基づく学習活動こそ、個性あるまちづくりに必要不可欠と考えるからです。

そのためには、今までのような『教育とか学習という問題は教育委員会の専断特許である』といっ

た組織の縦割り体制を越えて、町役場の全部局が、町民各位の生涯学習のために連携し、協力するネットワークを組むことが必要となるわけです。このことは、生涯学習は即ち総合行政であり、まちづくりの究極は、人づくりにありといわれる所以でもあります。

皆様の積極的なご参加を心からお待ち申し上げます」

「生涯学習かわにし」平成四年三月一〇日

二、「ふるさと創生一億円」事業からみた生涯学習事業

「まちづくり」と「生涯学習」が密接に関連しているということは、以上で十分だと思うが、まだ納得されない方がおられるかもしれない。本県の場合、生涯学習を総合行政として取り組んでいる市町村はないし、また「生涯学習都市宣言」をしているのが広見町だけという現状では、以上のような取り組みは、川西町特有のもので、「まちづくり」と「生涯学習」は別のものだと思う人が多いかもしれない。

はたしてそうか。ユニークな事

業として注目を集めた、自治省が実施している「自ら考え自ら行う地域づくり事業」(いわゆる「ふるさと創生一億円」)の取り組み状況がどういふものであったか見てみよう。(表参照)

これは、地域づくり事業であったが、「まちづくりの推進などの活性化」「地域経済の活性化」に続いて、「地域文化の振興による活性化」が第三位にあがっている。また、「魅力あるイベント開催による活性化」「地域間交流による活性化」など生涯学習と深い関わりのあるテーマが数多く取り上げられている。この取り組み状況からしても、今日の「まちづくり」においては、生涯学習が主要な役割を果たしているし、果たさざるをえない状況にあるといえる。この点をまず認識しておく必要がある。

表、「自ら考え自ら行う地域づくり事業」特色別事業数(自治省)

事業の特色	件数	(前 回)
まちづくり推進など活性化全般	6,230	(4,058)
日本一(世界一)づくり	103	(91)
「の里」づくり	458	(316)
「の国」づくり、ミニ独立国	41	(28)
地域のイメージづくり	2,867	(1,951)
人材の育成、組織づくり	2,322	(1,379)
その他	439	(290)
地域文化の振興による活性化全般	2,615	(1,772)
伝統文化の継承と活用	1,307	(901)
新しいふるさと文化の振興と発展	1,100	(743)
その他	208	(128)
地域経済の活性化全般	4,721	(3,330)
農林水産業の振興	1,000	(682)
商工業の振興	485	(336)
地域特産品の開発	686	(507)
観光の振興、レジャーランドの開発	1,936	(1,384)
リゾートの整備・開発	380	(275)
コンベンション都市づくり	18	(20)
その他	216	(126)
魅力あるイベント開催による活性化	1,983	(1,345)
文化イベントの実施	680	(454)
スポーツイベントの実施	313	(210)
観光イベントの実施	387	(286)
ユニークなイベントの実施	446	(304)
その他	157	(91)
地域間交流による活性化	696	(477)
姉妹都市提携	143	(99)
都市と農村の交流、農山漁村留学	344	(243)
特別村民・ふるさと会員制度	51	(39)
その他	158	(96)
国際交流による活性化	850	(571)
友好提携、姉妹都市提携による交流	310	(223)
ユニークな国際化の推進活動	311	(209)
その他	229	(139)
教育・福祉の充実・高齢化社会への対応全般	1,637	(1,025)
ユニークな健康づくりの推進	393	(264)
生涯学習の推進	630	(381)
その他	614	(380)
その他の特色	4,053	(2,663)
住民参加	1,055	(703)
CATV等地域情報化	118	(62)
景観の保全・活用	912	(626)
自然等地域の特殊資源の利用	959	(663)
個性的な建造物、複合的な施設	469	(297)
不要資源の活用	17	(17)
その他	523	(295)
計	22,785	(15,241)

出典：自治省「自ら考え自ら行う地域づくり」事業の取り組み状況について(最終報告)
1990(平成2)年11月



“Uターン者の地域再発見” 『まちづくりYOUターン ものがたり』

(財) 愛媛県まちづくり総合センター

まちづくり総合センターでは、去る三月一三日、『Uターン者の地域再発見、まちづくりYOUターンものがたり』と題して、「地域づくり研究サロン」を開催しました。

「出身地を一度離れてふるさとへ帰って来た、いわゆるUターンされた人たちの目に、地域はどう写っているのか。地域を一度離れたことで、ふるさとへの視点がどう変わってきたのか。地域の良さや問題は問題点などふるさとへの思いを話し合いながら、今一度地域を見直し再考するきっかけとすると共に、今後のまちづくりの足掛かりとなるように」と開催したので、愛媛大学教育学部教授の讃岐幸治先生を未知先案内人（コーディネーター）に、東は川之江市から西は一本松町まで県下各地域から、三名の女性をはじめ、地域・職域・人生域を異にする二二名の方々が参集し、ふるさとに対する熱い思い入れを語り合いました。この概要についてご紹介します。

集会では、まず当センターの渡

邊所長が、「今地域づくりに求められているのは、地域を見つめる目であり、先人たちの築いた歴史・伝統を掘り起こし、保存に努めると共に、更にどう発展させていくかなど、そこに住む地域の人々が主体となって取り組んでいくことが大切である。そして、Uターンされた方々は、客観的に地域を見る視野の拡がりがあります。各人の悩みや地域への思い入れをざっくばらんに話し合い、これからの地域づくり活動に役立てて頂きたい」とあいさつ。「意見Ⅱ異見であり、異なった意見があればこそ違った見方も出て来る。愛媛は盆地文化。ぬるま湯的なところがある。地域に帰って来てショックを受けたら、壁に突き当たったことなど悩みを話して欲しい」との讃岐先生の進行で自分語り（自己紹介）へ。

■自分語り

各人の自己紹介の中では、ふるさとへ帰って来た様々な理由が述べられたが、一番多かったのが『家庭の事情』であった。それも突き

詰めれば、「ふるさとの生活の魅力」が、Uターンを決意する要因ともなっていたようである。

また、ふるさとに帰って感じたことでは、「自然が豊かであり、友人・知人も多く住みやすい」「時間に追われる都会とは違い、ゆとりのある人間らしい生活が出来る」「都会より田舎にこそチャンスがある。自分に何か少しでも特徴があると、それが活かされる機会が多い」など良いところがある反面、「都会では人間の生活が見えないが、逆に、田舎では人間関係が煩わしい。他人の目が常にある」「海も山も近いが、本当の自然ではなくなってしまう。道路はアスファルトで舗装されてしまい、川はセメントで護岸工事が施され、



建物は鉄筋コンクリート造というふうには、都会的発想で物事を考えている向きがある。都会からみた理想としての田舎と、現実の田舎の姿とのずれは大きい。理想と現実のギャップを強く感じた」など、問題点も多く挙げられた。

今、都会を離れて地方で働く人の数は、年々増えている現状にある。人々の都会離れが始まったのは、都会の暮らしにくさの問題だけでなく、自分の生活を犠牲にした会社人間だった日本人が、個人の生活や家庭を大切にする社会人間へと意識が変わってきたことによるものと言われる。そして、こうした「Uターン」或いは「Jターン」「Iターン」という、比較する「都会」を知っている人たちだからこそ、違った視点で地域を見るこ

■こだわりのトーク

続いて行われたこだわりトーク（話題提供）では、山林業務のかたわら、冬季は「いのしし狩り」夏季は「アメゴ釣り」と大自然を謳歌している和田一夫さん（別子

山村）、看護婦として病院勤務をしながら、ふるさと太鼓に参加し、夏祭りや敬老会での演奏を通じて地域に溶け込もうと頑張っている藤岡真由美さん（小田町）、地域と共に歩むみんなの郵便局づくりをしようと、自費で地区内報を発行している二宮増男さん（長浜町）の三名の方が、それぞれの経験や意見を披露したが、参加者からも質問や意見が出されるなど、真剣な討論の中にも笑いのある和やかな雰囲気でのトークとなった。

「過疎と言われながらも、ぬるま湯気分があり、本当の意味での危機感に欠けるような気がする。自分の意見を出そうとすると、やはり相入れないところもでてくる



が、若者には可能性がある。これを活かしてほしい」（和田さん）

「子供や若者の数が少ないことを、田舎に帰って強く感じた。若者の定住のためには、親が『出ていくのはしかたがない』と思わず、地域の良さを子供に話すこと。また、若者に人気のある仕事や余暇が楽しく過ごせる機会や場を作ることが大切だと思う。小田町のために自分に何ができるかを考えていきたい」（藤岡さん）

「豊かな自然条件に恵まれていることが、時には、まちづくりにとって禍ともなっている。住民には様々な才能を持っている人がいる。これらの人を活用すれば、町は伸びる。そのための行政の役割は大きい。地元の意見を反映し、先頭に立ってまちづくりを展開して欲しい。仲間づくりを大切にしながら自分で行うことから取り組んでいきたい」（二宮さん）

■つながりのトーク

これら三名の方の意見を受け、参加者の方々から様々な意見が出された。その主たるものは、「仲間

同士の集まりで、地道な活動を続けていけば地域は変わる。年数はかかるが、仲間を広げて活動していくこと」「地域に住み、地域に根ざした活動を少しずつでも続けていくこと。批判しているばかりではダメ。自分の子供の事を考えてまちづくりを進めること」「Uターン者は周辺の狂人として、まず、ゲリラ的に頑張ること。コミュニケーションを図れば必ず想いは通じる」「関心のなさが問題。住民のひとりとして、地域に関心を持つこと。一生を過ごすふるさとであり、自分の生き方に関わる問題。住民・行政を巻き込んだ活動として盛り上げること」……等々、話は尽きない。

■ひろがりトーク

その余韻と興奮を残しつつ交流会へ。会うのは初めてという方が多い中で、それぞれ地域で頑張っておられるUターンの方々ということもあって、大いに盛り上がり、夜の更けるまで「まちづくり」や「ふるさと」についての熱い論議が続いた。

地域づくりのベースを求めて…

見 管 スイスを歩いた2週間／見想録(V)

【自由と平和を守る約束の国】 宮本俊一

◇電の飲送／名勝『ラインの滝』

驚きだった。六月も末なのに…
明るいハイク日和を、一瞬にして
妖しい暗雲が閉し、小豆粒大の雹
が篠ついて降ってきた…。

ヨーロッパでは、天下の壮観と
謡う『ラインの滝』での話だ。幅
一五m高さ二〇mの大滝が、轟
音と水煙をあげる…真ん中を二分
する小さな岩島に渡り、『近自然
防災工事』の見学を終えた私たち
が、渡し舟を降りたとんだ。

この日私たちは、チューリッヒ
から東北へ列車で約二時間、「ラ
イン下り」の乗船港コンスタツツ
に到着。ウンテル湖に臨む広大な
荒地に、近自然の理論で造成した

『エコロジカル公園』を見学。続
いてスマートな観光船で景観と食
事を愉しみ、愉快な挿話も添えて
「ライン下り」を堪能。バスで名
勝『ラインの滝』に來たのだ。

そして、いざ次の旅路へ…が激

しい降雹の飲送。頭に当たると痛
い！手近な公衆トイレ前の屋根付
き空地に飛び込み、三〇人ほどの
観光客と身動きできない雹宿り。

聞けば、「スイスの六、七月は素
晴らしい天気だが、今年は異常気
象…」とか。しかも「これは二時
間続くか四、五時間になるか？」
という。問題は後のスケジュール
だ。川を徒歩見学で上り、シャフ
ハウゼンの町並み見物。二時間後
スイス『近自然河川工法』の開発
実践者／クリスチャン・ゲル
ディーさんと晚餐会。その後列車
でチューリッヒに帰還の予定。

◇不審？／バスが客の仕訳

ふと、皆の視線が一方に注がれ
る感じ…。見るとバスがそろそろ
と這うようにくる。確か幹線道路
の駐車場から谷への道は、大型車
進入禁止のハズ。Uターンの場所

もない、どうしてバスが…と見え
ばバック進行だ。後部の窓には若
い女性が両腕を突っ張り顔を張り
つけ…運転指示。駐車場から谷へ
の曲がりくねった狭い道も彼女の
誘導か…と、他事ながら納得。

そう、私は観光客の呼んだ貸切
バスだと思った。バスが停まり一
群が殺到。運転手が何か言う…彼
らは後ろに下がる。すると我がグ
ループが乗り始めた。私はあわて
て続く、とたんだアが閉まりバス
が走りだす。乗客は乗ってきたあ
の女性の他二人位と私たちだけ…。

「なぜ他の人を乗せないの…」
不審に思い運転手を見ると、雹雨
で視界零の窓の曇りを片手で拭き
拭き真剣運転…。例のスイス親父
の顔。Tさんが駆け寄り新しいタ
オルで曇りを拭く…チラリ感謝の
色。誰も口をきかない。私たちは
シャフハウゼン駅で下車した。

私は、あの親切なバスが…の不
審が気になり、独り駅のホームで
考えた。そして「彼は契約の誠実
な履行者なんだ…」と結論。そう
だ！…私たちがバスから谷まで下

りて滝の方へ向かった時、子供が
追ってきて福留所長に、運転手か
らの「発車時刻と遅刻注意」のメ
モを渡した。路線バスも観光地だ
…滝見物をダイヤ化していた。

私たちは滝からは徒歩の計画。

バスの定刻発車は当然と無視した
が、運転手はシャウハウゼンまで
の運賃を払った日本人を、刻限違
反と考えず…突然の降雹に立往生
と判断。伝言メモに示した誠実さ
で危険を冒し、滝まで出迎え契約
を履行したのだろう。つまり彼に
は、他の人は契約外だったようだ。

◇誓約は／立場平等の防衛契約

ふと私は、スイスは「約束の国」
と…、七〇〇年昔の有名な『リュ
トリの誓い』を思い出す。それは、
スイスが『建国の日』とする一二
九二年八月一日のこと。フィア
ヴァルトシュテッテ湖畔リュトリ
の草原で、ウーリ、シュヴィーツ、
ニートヴァルデンの三邦が結んだ
『誓約同盟』の約束だ。

誓約の第一条は、「(前略) 当面
する奸策に鑑み、また各人の生命
と所有物をより容易に保護し、至

当な立場でよりよく保持できるよ
う、ウーリの谷間の住民、シエ
ヴィツの谷間の共同体、ニート
ヴァルデンの谷間の共同体は相互
に生命、財産を捧げ、援助、忠告
助成することを通じ味方しあうこ
とを、誠実に誓約する。(後略)」と
宣言した。内容は、人間としての
生存権と先祖伝来の棲み分けル
ル。即ち『自由と自治』を守る。
立場が平等な契約と想う。冒頭の
『奸策』とは、ハプスブルク家が、
家領を三邦地域に拡大・強化する
意図を指し、三邦の住民が、全力
を尽くし無償で相互に援助する
「約束」をしたのだ。

◆峠の強豪が狙う収益性

なぜ、強豪ハプスブルク家が貧
しい地域の領有を狙うのか。そ
れはウーリの住民が、アルプスの
中央ザンクト・ゴットハルト峠を
開削したためだ。アルプスは東西
に走る二つの山筋。これが一つに
交わる所がこの峠。だから地域は
一度の山越えで南北を通じ、水運
でオーストリアとフランスを結ぶ
東西便も使える十字路となった。

時は、中世の農業革命が都市の
発生と発展を生んで商業交易を盛
んにしており、この地方を「地中
海商業圏」と「北海・バルト海商
業圏」を結ぶ最短路線の要とし、
その収益性を高めたからである。

この時代ウーリは、神聖ローマ
帝国の直轄地だったが、帝国が支
配権をハプスブルク家に譲ったの
で住民たちが反対し、皇帝が買い
戻した経緯で、住民の自由と自治
に委ねる『帝国自由』の特許を得
た。これはハプスブルク家の所領
があり、日増しに自治権を奪われ
る近隣地域に大きく影響した。

シエヴィツは、教皇と皇帝の
戦いで皇帝に味方し『帝国自由』
を得たが、教皇側のハプスブルク
家が認めず抗争が続く。ニート
ヴァルデンは、ハプスブルクの代
官を自力で排除。事実上シエ
ヴィツに近い立場になっていた。
ところが、帝国皇帝空位時代の
混乱で、ハプスブルクから皇帝が
選出され家門世襲の恐れが出た。
ここに、皇帝を背景としたハプス
ブルク家の権力を除き、『帝国自

由』の自治と自由を志す。ウーリ
を含む三邦は、共同の敵に対し誓
約同盟』を結んだワケ。

◆独立へ／闘い実る自由と自治

一三二五年、ハプスブルク家は
三邦同盟に闘いを挑む。レオポル
ト伯爵の軍勢は、三・五kmの長蛇
の隊列だったとか。同盟側は山地
を巧みに利用して、この隊列を襲
い二千人に損害を与えたのに対し、
味方の戦死者一二人の大勝利を挙
げた。有名な『モルガンテンの合
戦』はこう伝える。しかし、一三
三二年に都市ルツェルンが同盟に
加盟するや、その波及を恐れてか
：レオポルトはまたも大軍で来襲
したが、同盟軍はこれを撃破した。
こうした勝利は、先祖の棲み分
け以来のルール『自由と自治』を
希う近隣の都市や溪谷共同体を刺
激した。当時、スイス地域を支配
していた大領主、東のハプスブル
ク家にはチューリッヒ、西のサ
ヴォイ家にはベルンが「自治権拡
大」の戦いを挑み、一三世紀以後
両家の支配を崩していた。こうし
た趨勢もあり、この両都市と二つ

の溪谷共同体が誓約に加盟し、一
三五三年『八邦同盟』が成立した。
ところが一四九九年、神聖ロー
マ帝国のハプスブルク家出身皇帝
が、いわゆる「帝国改革」に絡め
てスイスの再度の支配を狙う。同盟
は『シエヴァーベン戦争』で皇帝
軍を撃破、ついに事実上の独立を
獲得した。そして、一五一三年に
は現連邦の土台となった。『一三
邦同盟』に拡大され、一七九八年
のナポレオンの侵略まで続く。

とかく法律・制度は上から強制
されがち。しかし経過に見ると
おり、スイスの人々が現連邦の土
台とした『同盟』は、原則的には
立場平等の横の『契約』であり、
それが次号に述べる波乱に鍛えら
れ、「約束の国／スイス」気風を
形成したようだ。しかもその本質
は、棲み分け時代からの伝来の
自然的ルール『自由と自治』が培っ
てきた「生存倫理」と想い、バス
運転手の毅然たる態度に、私はそ
の現れを見る。(森田安一著『ス
イス』刀水書房等を参照)

お気をつけて

出張するので、最寄りの〇駅を早朝六時に出る列車に乗った。三月も半ばだというのに、霜が真っ白な朝だった。

発車間際にMさんが駆け込んで来た。Mさんは、私の姿を見つけると、にこっと笑って、横へ来て腰掛けた。Mさんは、U町にある聾学校の高校二年の少女である。毎朝この列車でU市まで出て、そこからバスに乗り継いで、U町まで通っているのだそうだ。

「どこへ？」と、はっきりした発音でMさんが聞いた。私も口を大きく開けて、「東京」と答えた。「東京」と、おうむ返しに言っ、Mさんは驚いた顔をした。おそらく、私があまりにも怪装であったことと、一人旅であったからだろう。そしてMさんは、自分の左手の掌へ、右手の人差指で、「お・き・を・つ・け・て」と、私の顔を見ながら、一字ずつゆっくりと書いてくれた。私は、ジーンと熱

広見町 久保田ユズル



いものが胸にあふれた。そして、それがゆっくりと身内に広がるのを覚えた。

生まれつき言葉の不自由な少女が、まだ暗いうちから乗物に揺られて、二時間もかかって学校へ行く様な苦勞をしているのに、相手に対して、こんなに優しく美しい言葉を掛けてくれたことに感動した。冬に逆戻りした様なその朝の寒気も、吹き飛ぶ様な温もりを感じていた。

また、ある曇りの日の夕暮れ。まだ四時過ぎなのに、ライトがいはるほど冬の町は昏れていた。私は、

街の裏通りをのろのろと車を走らせていた。道路工事をしていたので、道幅が狭く、車がやっと通れる程だった。

向こうからA氏が四、五人連れで歩いて来た。私の車の横を通る時、運転席の私を見て、A氏は、手を振って会釈をした。私も、車を止め、左側の窓を開けて、「お元気ですか」と挨拶をした。A氏も、「ご無沙汰しています」と言っ、

「どちらへ？」と尋ねた。私が、もう少し先の方の知人を訪ねるのだと話すと、「ああ、それは、それは」と言い、車を出そうとしている私に、丁寧に、「お気をつけて」と言ってくれた。「お気をつけて」と言っ、七〇代の男の人から、こんなやわらかい言葉を聞こうとは思わなかった。私は非常に感動した。その時と場の中で、胸に染み込む様な言葉だった。私は、その言葉の余韻の中で、慎重に慎重に車を進めた。

「お気をつけて」……何と美しい日本語だろう。「気をつけなさいよ」には決して無い相手への敬意。

「ご注意ください」の素っ気無さや固さの無い言葉。ぎすぎすしてるとまでは言いたくないけれど、何か気に入らない言葉がやたらに増えているような現代。「お気をつけて」という言葉を聞くと、私は、ふっと温もりを感じ、人とのつながりを感じる。

次回は、大洲市阿蔵の郷土研究家 常磐井忠伽様をお願いします。



医療情報システム

八幡浜市 山本久夫

前執筆者の佐々木先生から、マイタウンに原稿を書くように依頼された。「マイタウン、マイタウン」どこかで聞いたような名前だなど思った。参考のためにと送られてきたものを見たらこれは何だ「舞たうん」！。これなら昔からといったも、えひめコンピュータコミュニティシンククラブに入ってからだが、そこから送られてくる馴染みの雑誌ではないか。それからパソコン通信タウンネットに関係の深い医療情報に関することでも書いてみようかと思った。

私は昨年はじめまで、県医師会の医療情報システム検討委員会委員として、愛媛県の医療情報ネットワークをどのように構築するかを勉強をさせて頂いた。細部のコンピュータの技術的なことについては、私のような初歩的な者はないといけないけれど、どのようなものを構築して行くべきか、どのような方法があるかなどについては、いろいろ勉強させて頂いた。まず初歩的なキーボードアレルギーを起こさないFAXからということで、県下の全医療機関にFAXを設置してもらって、医師会のために必要な情報を流そうということになり、その方向に進んでいる。私としては、今あふれる情報の中で、一方的に送られてくる情報よりも、自分で知りたいものを知り、自分で得たい情報を引き出すことの出来るパソコン通信の方をより希望している。幸い県医師会のご尽力によりキーステーションも作られたので、その発展を期待してる。



しかし、若い医師からお年寄りまで抱えた医師会のこと、パソコン通信がどこまで普及するか問題であるが、パソコン通信が医療に取り入れられて、それなしにはより良い医療が行えないというまでに発展してもらいたいものである。そのようなシステムが出来上がるまでには時間がかかるであろうけれど、各地で実験的な試みが行われている。

一昨年の秋、博多で開かれた医療情報連絡協議会では、八幡浜出身で白内障手術では日本でも屈指の林文彦先生が、本院と二〇キロメートル離れた分院をデジタル電話回線で結ぶ方法を実演された。分院にいる患者の眼底を、本院で複数の眼科医がモニターテレビを見ながら、話し合い、検討し指示を与えるので、手術の時期、適否などがより正確に診断できる。また、その画像を光ディスクに入れておくので、必要に応じて利用出来る。また、眼科医会が東京大学での手術の様子を、衛星放送によりリアルタイムで全国の眼科医に放映し様子も報告された。また、他の報告であるが、離島の多い長崎県では、離島の診療所と国立長崎中央病院との画像電送ネットワークシステムの現状が報告されて大変感銘を受けたものである。このような遠隔地を、電話回線などで結んで、明瞭な画像を送り、未熟の医師でも専門外の科目について、ベテランの医師から適切な指示を受けられることは有難いことであり、そのような情報がこの医療機関でも、受けられるようになって欲しいものである。

しかし、そのようなメカが有効に働く時代が来ても患者さんと医師との人間関係は大切であり、診断に割いてきた時間をより多くし、患者さんとのふれあい、説明、生活指導、励ましなどに活用したいものである。

南予が続いたので、次回は、東予の西条医師会長、西条市教育委員で、県医師会医療情報システム研究委員長でもあり、詩人ともお聞きしている篠原秀幸先生にお願いします。

我らが 双岩実年会



会長 三瀬 速太氏

瀬速太氏にお話を伺った。

三瀬速太氏は、「今は、大体子供に任せている」というガソリンスタンドで私を迎えてくれた。

総勢五五名の会員は、全てが男性である。会員の年齢は四〇代後半から六〇代が中心で、その職業は、農業あり、自営業あり、建設業あり、公務員ありと職種も様々である。この事が後々、色々な事業を実施する際に大変役立つ様である。

現地へ向かったこの日は、ぽかぽかと温かく、道路沿には菜の花がばらばらと目につく、絶好の取材日和。

約束の時間まで少し余裕があるので、双岩実年会の手作り公園「ジョイフル夫婦岩」を訪ねてみることにした。

今回は、七年目を迎えますます元氣な八幡浜市の双岩実年会の活動内容などについて、会長の三

県道を車で一〇数分程走ったところに一見してすぐそれと分かる、その名のとおり二つの岩が仲良く寄り添う「夫婦岩」が目飛び込んでくる。

そこには、野外食堂や休憩所が整然と建てられており、シーズン中の賑やかな声が聞こえてくるよ

えぬ出来栄えにただただ感心するばかり。真の実年パワーを見た思いだ。

「地元においてもこの夫婦岩が立派だとも思うこともなかったが」と、三瀬会長は笑う。歳を取ってみると、「こんな岩は、他にはないだろう。それなら一つここを拠点として活動しよう」と取り掛かったのである。

仲良く寄り添う「夫婦岩」



会員が自らの労力と、自らの資金を出し合って約一、〇〇〇平方メートルの敷地を造成し、そこに野外食堂や休憩所を建てたのである。

勿論、建物は素人では建てられるものではない。会員の中には、本職の大工さんが二人居て、彼らが腕を振るったのである。自分の持つ技術は惜しまず提供し合う。「そうじゃないとこんな事やれないですよ」の言葉に、連帯感の強



さを感じる。

竹のみを材料とした「竹山荘」の建設にあたっては、宮崎まで視察に行くほどの熱の人れよう。

その甲斐あってか、今では毎年七月から八月末までのソーメン流しとバーベキューは五千人を越える人で賑わうとのことである。

「ソーメン流しのソーメンは全て氷で冷やし、だし汁についてはプロの方から手解きを受けている」と会長は言う。しかしながら、そのだし汁は会員の奥様の手作りであるのだ。夫婦岩（双岩）の所以はこのへんにあるのかな。

また、バーベキューに使う炭は、会員自らが窯を作って焼く。会員の中には、窯に火を入れると徹夜で火の番をしてくれる人もいるとのことである。

去年は、九月初めから「芋炊き」に加えて、雄鍋を初めて行ったと

ころが大変好評だった」と会長の顔もほころぶ。「芋炊きには、他にはないジャコ天の原料である「はらんぼ」を団子にした物を入れるんです。これが堪らなくおいしいんですよ。スープも全部飲んでいただけです。それに雄鍋の雉は地元で養殖しているんですよ」と、そのこだわりと自信が伺える。

「ジョイフル夫婦岩に、ログハウス調の事務所兼休憩所と水洗トイレをそれぞれ建設していただいたが、これも私たちのこれまでの活動を認めていただいた証拠でしょう」と、市側の対応にも満足の様子である。

「八幡浜市には今後も私たちに協力していただけたと思います



盛況の

バーベキューコーナー

よ」と、理想的な官民一体のまちづくりが進んでいるようである。

この他に、地元小学生を巻き込んだ「ほたるの里づくり事業」、或いは「野菜・果物の無人販売」など地域に根ざした事業を展開中である。

このように順調に活動を進める双岩実年會にも悩みがない訳ではない。事業も順調だし、会のコ

ミュニケーションも旨くいっていると思うのだが、ただ一つだけ、後継者が育っていないという問題が残っている。今の会員の多くは

現役を引退した人が主で、どうしても実年という事で五〇代、六〇代が中心になってしまふ。それに

四〇代、三〇代の働き盛りでは、自分の生活に一生懸命なのが現状です」とやや表情も暗いのだが、

「まず、実年會という名称を変えることから考えていきたいと思

います」と課題を解決しようとする姿勢には、どこか問題そのものを

楽しんでいるかのようでもある。愚痴や泣き事など徹底のかけらも

出てこない。

双岩実年會の行動力と結束力を持つてすれば、どのような障害が起きようとも、きっと乗り越えられると思います。

是非今年は、多くの方に「ジョイフル夫婦岩」を訪ねていただき、ソーメン流しやバーベキュー、特に「はらんぼ」のはいった芋炊きをご賞味いただきたいと思っています。

夫婦岩の網の付けかえも協力して



会長さんには、大変お忙しい中、気持ち良く取材に応じていただき誠にありがとうございます。

最後に、双岩実年會の皆様のな

お一層のご活躍をお祈りします。
(取材 研究員 富永廣次)

お便りコーナー

絵画展で地域の文化活動に協力

近代日本美術協会四国支部

渡 邊 祥 行

昨年度は、西日本一小さい村である別子山村（宇摩郡）にスポーツを当て作品を公募しました。別子山村は、別子銅山の最盛期には、県下では松山市に次ぐ人口を擁し、活況を呈していた村で、今でもその当時の学校・劇場跡・別子銅山坑道跡など、昔を偲ぶ史跡も多く残っています。

また、秋の紅葉が美しい赤石山系には、四国では珍しい白樺林の中七番の風景などが有り、それらを描いた作品が一五〇点寄せられ、審査の上、入選作品を県立美術館に展示した後、別子山村をはじめ約一ヶ月県内各地を巡回し、好評を得ました。

■第二回 瀬戸内海に浮かぶ水

軍跡と架橋の里を選定

今年度は、瀬戸内海に浮かぶ歴史と景勝の地伯方島（越智郡伯方町）を選定させていただきました。伯方島の景勝地としては、船折瀬戸、鶏小島、西瀬戸架橋ルートの方方・大島大橋などがあります。

公募では東京、大阪をはじめ広島、香川、徳島各県より二五〇点

に余る力作が寄せられました。出品作品の一部を紹介します。



伯方島の風物、歴史等を肌で感じたものを、楽しい作品に仕上げた、アカデミー賞の伊藤さん（西条市）

大橋を望む造船所のある佇まいを中心に伯方島の夕映えを表現した、伯方町長賞の青野さん（東予市）

島々をダイナミックに表現し、力強さを感じさせ、暮色の雰囲気の良い出ている近美賞の岡部さん（新居浜市）

その他各賞を受賞した七〇点など……。

三月一六日～二一日まで県立美術館、三月二三日～三十一日の間伯方町民会館、四月には、ふるさと美術古墳館（朝倉村）ほかを巡回しました。

毎年我が会員も題材地にスケッチ旅行を企画し、候補地に出向いて、思い思いにイーゼルを立て、制作しながら、今まで気のつかなかった風景や文化に触れ、ふるさととの良さを見直しています。

今年も、第三回目の候補地を目下選定しているところです。

我々は絵画活動を通じて、少しでも地域文化の向上にお役に立ちたいと願っている次第です。

今後も毎年一回のペースで、県内の市町村にスポットを当て実施していきたいと考えていますので、ご希望があればお気軽にご連絡下さい。

連絡先

近代日本美術協会四国支部

事務局

☎〇八九九（五八）二〇七三

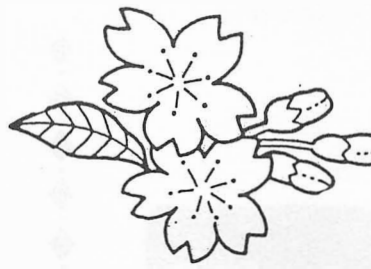
公募第2回「地域を描く美術展」

描く絵画展

●とせ 平成26年 3月16日(火)～21日(日) ●会場 愛媛県立美術館

巡回展 (選抜)

3月23日(火)～31日(水) 伯方町民会館
4月14日(木)～20日(金) 伊予銀行本店(松山・新居・西条・宇和・大洲・喜多郡) 徳島市立美術館(徳島市)
4月1日(木)～10日(土) ふるさと美術館(朝倉村)



媛のくに

フラッシュ

「安森洞旧農家
生活体験施設」
「いもり」を囲んで
広見町

「四国」便利な村」に
あなたも定住してみま
せんか。
定住化住宅用地貸付事業
今春に募集
新宮村

去年一月末に高知自動車道（川之江JCTと大豊IC）が開通し、新宮村には四国で唯一のインターチェンジが出来ました。
村では開通を契機に、「四国一便利な村」をキャッチフレーズとし、若者の定住を推進するため、新宮村定住化推進に関する条例を制定するなど、高速道路の開通に伴って利便性が向上したことを地

「緑と清流の町」をキャッチフレーズに、住みよい町づくりを進めている当町大字小松の地を、蛇状の溪流に沿って、段々畑を眺めながら登って行くと、その最終地に「安森洞旧農家生活体験施設」が見えてきます。

域の活性化につなげようとしています。

去年七月には定住化住宅が完成し、新婚家庭四世帯を含む五世帯が現在人居しています。さらに、現在、定住化住宅用地の造成工事を進め、今春五月頃には完成し募集を行う予定で作業を行っています。

《定住化住宅用地貸付事業概要》

場所	新宮村大字馬立柿の下
物件	六区画（四ツ道路） 一区画約二二〇平方メートル
内容	二〇年間低廉価格貸付 その後無償譲渡
条件	新宮村に定住を希望する四〇歳以下の者を世帯主とする世帯

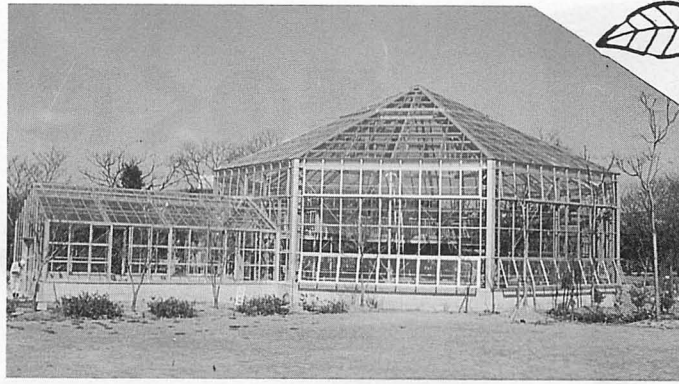
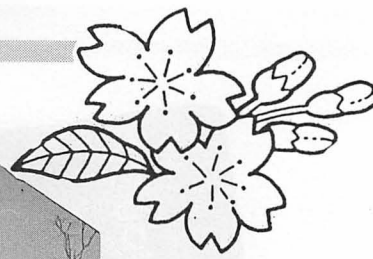
この施設は、県アグリトピア構想推進事業の一環で、町内外を問わず、ふるさとを偲び自然に親しむ人のリフレッシュの場として建てられました。建物内には『いもり』もあり、当事業で取り組んだ「きじ」「あまご・ます」の養殖

なお、詳しい内容等については、新宮村企画調整課まで。

☎（〇八九六）七二二二二二



場より得られる、山・川の幸を串焼きにし、昔話に花を咲かせるのもよいのではないのでしょうか。



「えひめ花まつり」

を開催

愛媛県

県内初の 亜熱帯植物展示館 完成 愛媛県緑化センター

花と緑の祭典「えひめ花まつり」が、四月二十九日から五月一日までの三

また近くには、安森鐘乳洞から流れ出る冷水を活用した、「そうめん流し」もあり、当地を訪れる人に涼を提供しています。

近年県民のライフスタイルの変化により、室内装飾として植物を屋内にいたり、インドアガーデンを設置して観葉植物を置く等、一年を通して緑を楽しむ家庭が増え、当センターにも亜熱帯植物の管理方法や種類等の問い合わせが多く寄せられています。

そこで県では、このような皆様の要請に応えるため、「亜熱帯植物展示館」を建設致しました。

施設の概要は、床面積四一九平方メートル、高さ一メートル、鉄骨造全面ガラス張り、（一部二階建て）正八角形の温室です。

施設内には、バナナやパイナップル

都市と山村の交流や安らぎ、郷愁を求められる方は、是非当地で心身をリフレッシュして下さい。

ブルの果樹やハイビスカス、アナナスなどの花の咲く樹木、ココヤシ、トックリヤシなど合わせて約九〇〇本（約二〇〇種）の亜熱帯植物を展示し、南国ムードいっぱいです。

施設の見学は無料で、月曜日及び祭日以外は、午前九時三〇分から午後四時まで開館しておりますので是非一度お越し下さるようご案内申し上げます。

お問い合わせ先
愛媛県緑化センター
温泉郡重信町田窪字門田七四三

☎（〇八九九）六四一五五二七

日間、松山市堀之内の愛媛県民館において「花と緑の青い地球（ほし）」をテーマに開催されます。

「えひめ花まつり」は、花き農

業の振興と緑や花々とのふれあいを通じて、潤いと安らぎのある快適な生活環境づくりを推進するため、愛媛県、松山市、花のえひめ

づくり推進協議会、愛媛県花き園芸組合連合会及び愛媛県園芸文化協会が、関係諸団体の後援と協賛を得て毎年開催しているもので、今年で二八回目を迎えます。

会場には、趣味の園芸展、フラワーデザイン展、生け花展、協賛商社展など多彩な展示のほか、栽培技術相談、園芸バザール、園芸

『道後温泉誇れるまちづくりフォーラム』の開催

道後温泉誇れるまちづくり推進協議会

「道後温泉誇れるまちづくり推進協議会」では、日本最古の歴史と伝統を誇る道後温泉の将来像を考え、温泉情緒と安らぎのある全国に誇れる魅力的な温泉郷づくりを進めるため、各種事業に取り組みむこととしております。その一環として、「まちづくりフォーラム」を次のとおり開催します。

◆テーマ◆『21世紀の道後をど



教室などの催しや、花の種子プレゼントも予定しております。

入場は、無料です。陽春のひとつときを色とりどりの春の花と新緑

うデザインするかー誇れるまちづくりを目指して」

◆開催時期◆平成五年四月二八日（月）午後一時から午後五時

◆開催場所◆

◇フォーラム◇ホテル大和屋

◇分科会◇道後温泉本館、椿湯、伊予鉄道後温泉駅、放生園

◆内容◆

○記念講演

演題 『伊予の伝承と未来』

講師 梅原 猛（国際日本文化研究センター所長）

○パネルディスカッション

『誇れる温泉郷づくりを目指して』

コーディネーター 藤目節夫（愛媛大学法文学部助教授）

パネリスト 天野祐吉（コラムニスト） 溝尾良隆（立教大学文学部教授、高島

の香りがいっぱいのかきで楽しくお過ごし下さい。

なお、「えひめ花まつり」に併せて、重信町の愛媛県花き総合指導センターにおいても「春の花フェスティバル」を同時開催致しますので、こちらの方へもぜひお出掛け下さい。

○分科会
【セッション1】（道後温泉本館3階）

麻子（高島市立吉田図書館学芸員、奥村武久（雅進協議会総務企画委員長）



―道後のランドデザイン―

コーディネーター 島崎有三（道後商店街振興組理事長）

コメンテーター 青野勝広（松山大学経済学部教授）

【セッション2】（椿湯2階）

―道後温泉百周年記念―

コーディネーター 新山和臣（道後温泉旅館組合理事長）

コメンテーター 天野祐吉（コラムニスト）

【セッション3】（伊予鉄道後温泉駅2階）

―観光と文化―

コーディネーター 奥村武久（雅進協議会総務企画委員長）

コメンテーター 溝尾良隆（立教大学文学部助教授）

高島麻子（大正ロマン館学芸員）

【セッション4】（放生園）

―街並み環境―

コーディネーター 藤目節夫（愛媛大学法文学部助教授）

コメンテーター 帽子敏信（愛媛県議会議員）

平成5年度 事業計画

— H5. 4. 1 ~ H6. 3. 31 —

(財) 愛媛県まちづくり総合センター

(財) 愛媛
県まちづくり
総合センター

は、県内各地
で進められて
いる地域づく
り活動の支援
機関として、
潤いと活力に
満ちた新しい
愛媛のくにづ
くりと二世
紀の愛媛を創
造していく基
盤づくりのた
め、県内の各
地域が進めて
いる歴史文化
など地域固有
の資源に根ざ
した着実な地
域づくり活動
を支援するこ
ととし、平成
五年度の事業
計画を次のと
おり定めます。

一・基本方針

(1) まちづくりに関する情報の収集・加工・提供

急速に変化する社会の中で、新しい試みや取り組みなどを模索する地域づくり活動に関する情報の収集・加工・整理・提供に努め、地域の要請に応える「情報センター」としての機能の充実を図る。

また、平成五年度は有用なテーマによるまちづくりに関する調査研究を行い、その成果の情報提供に努める。

(2) まちづくりイベントの企画並びに支援

地域主体のイベントは、地域の人たちのまちづくりに対する意識啓発とともに、住民主導の内発的な地域づくりへの意欲を高めるなどの効果が期待できることから、地域主導のイベントを引き続き支援していくとともに、「まちづくり草の根文化講演会」を開催する。

(3) 人材育成を通じたまちづくり活動の支援

地域づくり活動の極めて重要な

ファクターとなる「ひと」が地域に育っていくためには、次世代を担う若い後継者を中心にした意識おこしが不可欠であることから、「ひとが育つ」環境づくりのため、の諸事業を展開する。

平成五年度は、まちづくりの研究活動に視点を置いた新たな支援事業を実施する。

二・事業計画

【情報関連費】

(1) まちづくりに関する情報の収集・加工・提供

① 機関誌「舞たうん」の編集・発行

地域のまちづくり活動の情報発信と地域づくり活動者のネットワークキング誌として、また、地域に根ざしたまちづくり情報誌として、機関誌「舞たうん」を継続して編集・発行する。

なお、「舞たうん」の情報誌としての機能をより充実するため、随時誌面構成の検討を行い、内容の

充実を図っていく。

② 情報収集刊行物等の整備

まちづくりに関連の各種刊行物の定期購読等により、活字情報による情報の蓄積に努めるとともに、近年の情報メディアの多様化に対応して学習用「まちづくりビデオ」等の整備も進める。

③ 主要事業成果の刊行物化と活用

「地域づくり研究サロン」「センターの支援イベント」「先進地交流研修ツアー」など、センターが実施する各種事業に伴う事業成果の刊行物化を図り、広く県内各地域の地域づくり活動の活用 に供する。

④ まちづくり調査研究事業の実施

センターのまちづくりに関する調査研究機能を充実するため、まちづくり活動に有用なテーマを選定し、調査研究活動を進め、県内各地へのまちづくり情報の積極的な加工提供活動を行う。

⑤ 新鮮かつタイムリーな情報の収集・提供（業務管理費）

県内各地域からのまちづくり情報の個別需要に迅速かつ的確に対応するため、常に新鮮な情報の収

集・加工に努め、個別需要に対しては面談・電話・FAX・郵送などのあらゆる手段によって需要者の希望に応じた情報の提供を行うなど、情報センターとしての機能の充実に努める。

⑥ パソコン通信ネットワークの実用実験

新しい情報メディア「コミュニケーション型パソコン通信」を、地域づくり活動に活用する実用実験活動を「えひめコンピュータ・コミュニケーション・クラブ」と共同で引き続き継続する。

【イベント企画援助費】

(2) まちづくりイベントの企画並びに支援

① イベント情報誌の編集・発行

年間を通じ県内各地で繰り広げられる、あらゆるジャンルのイベントの総合情報誌として、(財)愛媛県市町村振興協会との共刊により「えひめイベントBOX」を、保存活用タイプの通年型イベント情報誌として編集・発行する。

② 「地域づくり研究サロン」の開

設

まちづくりに関する様々な課題や時代に即したテーマ等について深く検討を重ねていくため、専門家の意見を交えたサロンを継続して開設し、まちづくりに意欲を持つ人たちの研鑽とまちづくり意識の高揚を図っていく。

③ 「まちづくり草の根文化講演会」の開催

地域住民を対象に、地域固有の歴史や生活文化に裏打ちされたまちづくり活動の原点を探り、個性的で独創的な活力と潤いのあるふるさとづくりを進めるため、まちづくりの先駆的实践者等を招いての講演会を、地域に即したテーマを個別に選定し開催する。

【人材養成費】

(3) 人材育成を通じたまちづくり活動の支援

① 「地域づくり先進地交流研修」の実施

これからの地域づくり活動を担う地域在住の若者を、県外のまちづくり先進地に派遣し、全国レベ

ルのまちづくり事例や実践者と交流させることにより、若い活動者の新たな意欲や能力開発に資するため、先進地交流研修を実施する。

② 「ふるさとコンサルティング事業」の実施

地域の自立と地域づくりに真剣に取り組む地域の有志活動者グループを対象に、先進地の実践者等による「助言グループ」を継続的に派遣することにより、地域づくりに関する実践的研究活動や地域づくり活動の理念や本質についての自立的な学習活動を支援する。

③ 県外の先駆的活動者との交流事業

刻々と変化するまちづくり活動の現状やポストまちづくり動向等について、県外地域づくり活動者との交流を通して新たな情報の収集に努める。

④ 「ふるさとコンサルティング事業フォロアアップ推進事業」の実施

ふるさとコンサルティング事業のフォロアアップを進めるため、前年度実施町村の有志活動者グ

ループに県内アドバイザーを派遣し、グループ活動の重要性を認識させるとともに、その育成と活動継続を支援する。

⑤ 「まちづくり研究アシスト事業」の実施（新規）

地域において自主的に活動するまちづくり研究グループは、地域活力と新たなまちづくりを創造していくための貴重な存在であることから、当該グループ等が実施する学習・研究活動並びに広域的なまちづくりイベント等の開催を支援し、ひとが育つ環境づくりを進める。

（財）愛媛県まちづくり総合センター

人 事 消 息

■平成5年度 センター職員（☆印は新しいスタッフです）



☆研 究 員
尾 崎 弘 典
（一本松町役場）

☆研 究 員
石 家 清
（肱川町役場）

☆事 務 員
川 原 千 明

（前列左から）☆事 務 員 川原 千明 所 長 渡邊 智 事 務 員 白石まり子
（後列左から）主任研究員 松森陽太郎 ☆研究員 尾崎 弘典 ☆研究員 石家 清
研 究 員 藤原 元久 研 究 員 松岡 正範

●4月1日付けで、研究員・事務員として勤務された4名の活動の拠点が変わりました。これからよろしくお願いいたします。



上ノ田 誠一
（中山町）



国田 敦彦
（西条市）



富永 廣次
（肱川町）



安田 佳可

ひと雨ごとに暖くなり、頬に感じる風も爽やかになりました。緑の美しい季節になりましたね。時間をみつけて出かけてみませんか…。

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係

二人のMs・（白石・川原）まで
〒七九〇 松山市三番町八丁目

二三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

（財）愛媛県まちづくり

総合センター

TEL 〇八九九（三三）七七五〇
FAX 〇八九九（三三）七七六〇

発行・平成五年四月十五日
（財）愛媛県まちづくり

総合センター

えひめ地域づくり研究会議